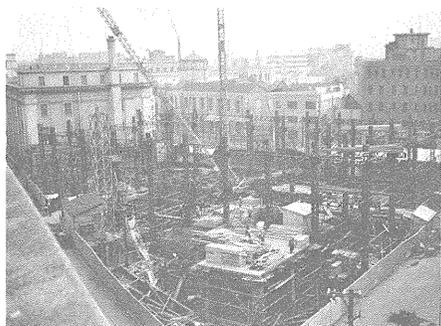
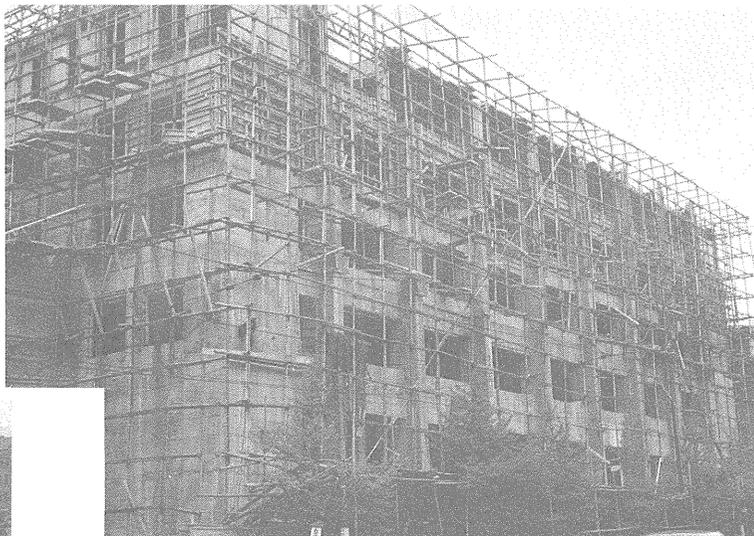
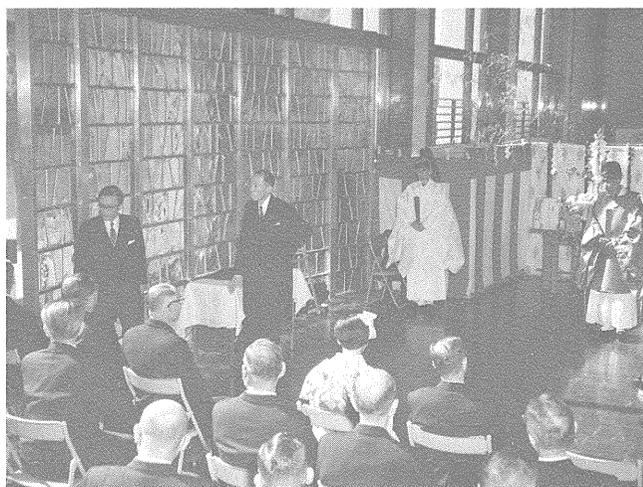


本店新築と40周年

工業化の進展を背景に、神奈川県下の経済が全国を上回る成長を遂げつつあるなかで、当行はこれに対応した施策を展開して業容拡大を果たした。昭和35年に完成した新本店はこうした当行の躍進の象徴であり、同時に迎えた創立40周年を祝いながら全行員は一層の飛躍を祈念したのであった。



新生横浜銀行にふさわしい新本店を、という全行の要望が実現し、昭和34年着工のはこびとなった



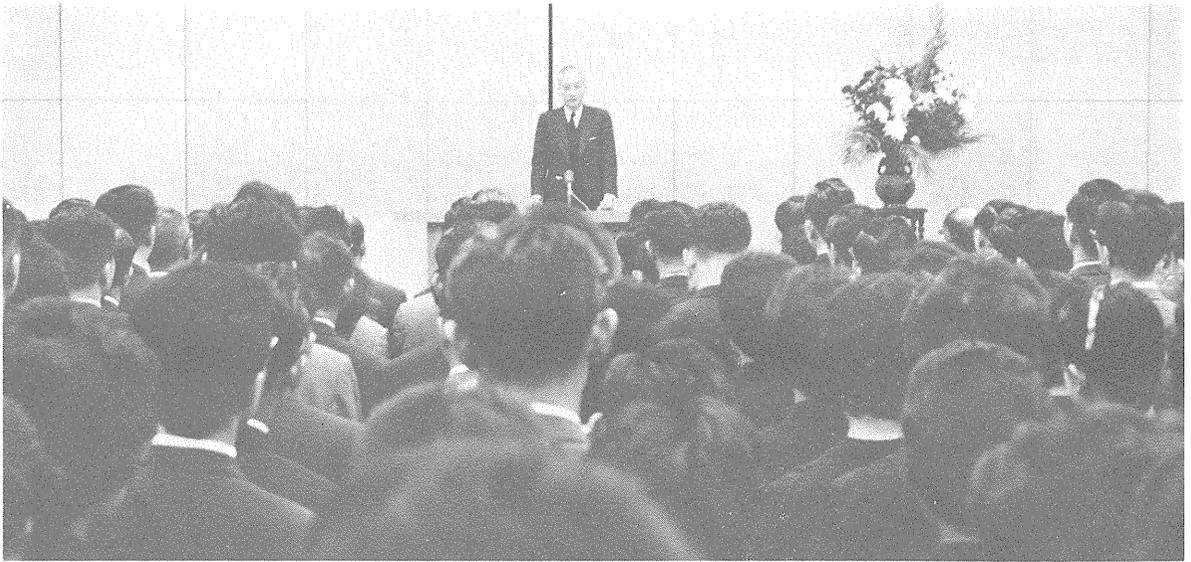
建設工事は順調に進捗し定礎式(左)を経て35年11月待望の竣工式(上)を迎えた



昭和37年9月、吉村頭取の突然の訃報は全行を悲しみに包んだ。横浜チャペルセンターで挙行された銀行葬には各界の名士をはじめ遺徳を偲ぶ行員が多数参列し、長い献花の列が続いた。



本町に完成した現本店



昭和37年11月、当行第6代頭取に伊原隆が就任した

高度成長の展開

昭和37年、吉村頭取の突然の死去という不幸に見舞われたが、伊原新頭取を迎えて体制づくりを進め、地域社会の発展とともに大きな躍進を遂げた。こうしたなかで銀行業務の態様は大きく変化していった。他行店舗の大量進出によって競争は激化し、新たな預金源を求めてさまざまな施策が展開され、一方では大衆化と機械化が進展した。



事務機械の導入も次々と行なわれた 本店営業部に置かれた当座預金会計機(上)と手形交換に活躍したブルーマシン(右)



地域開発の進展や銀行大衆化に伴って預金源も多様化した 駐留軍労務者の退職金の出張勧誘(上)と個人預金増強のアベック訪問(右)



地銀第1位に

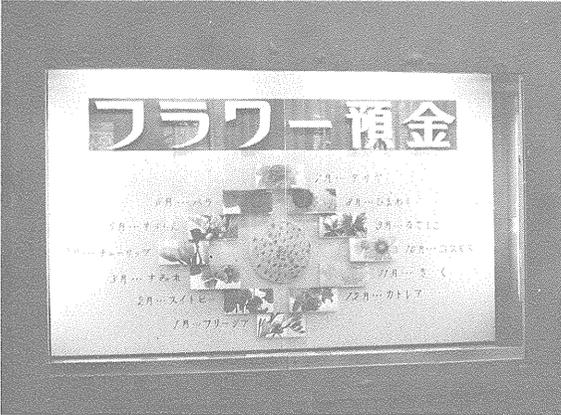
昭和40年代に入りいざなぎ景気が息の長い好況を続け、日本経済は30年代を上回る高成長を遂げた。一方金融界では競争原理の導入と経営の効率化が叫ばれ、厳しい経営環境の時代を迎えていた。こうした情勢のなかで当行は、地元に着目したきめ細かい施策を展開して、43年総預金5千億円を達成し、翌44年には地銀第1位となった。



当行の顔、テラーを一堂に集めて開催された第1回テラー大会



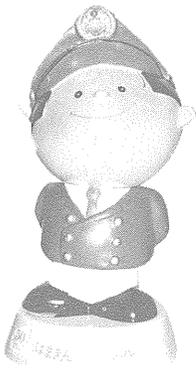
昭和43年10月、5千億達成を目指す熱のこもった総決起大会



昭和41年、誕生月にちなんだ花の通帳、フラワー預金が登場した



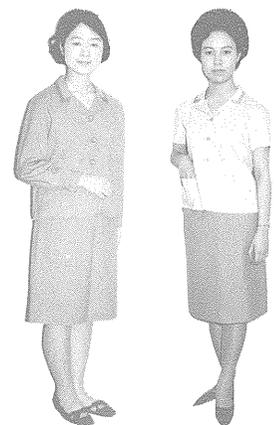
一層の顧客とのふれ合いを求めて支店長相談日が設けられた



マスコット「マルちゃん」
まず貯金箱で登場



手造りの人形を県下施設に贈る善意運動で集められた人形の贈呈式



長い間親しまれてきた上っ張りに代わって、新しい女子事務服が制定された



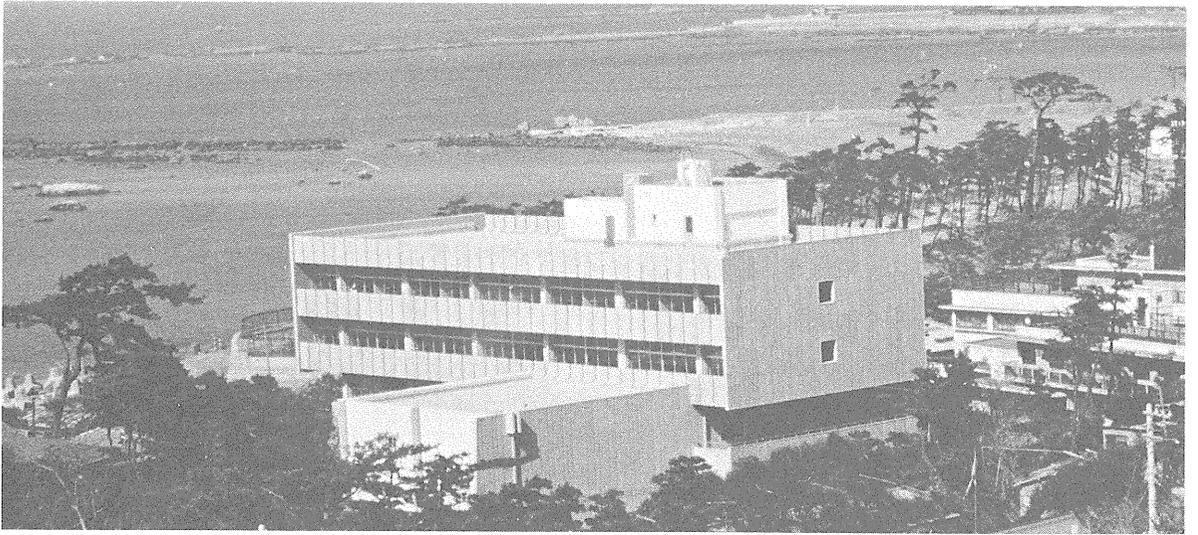
昭和44年5月、伊原頭取は全国地方銀行協会会長に就任 当行は会長銀行として業界での重責を担うことになった



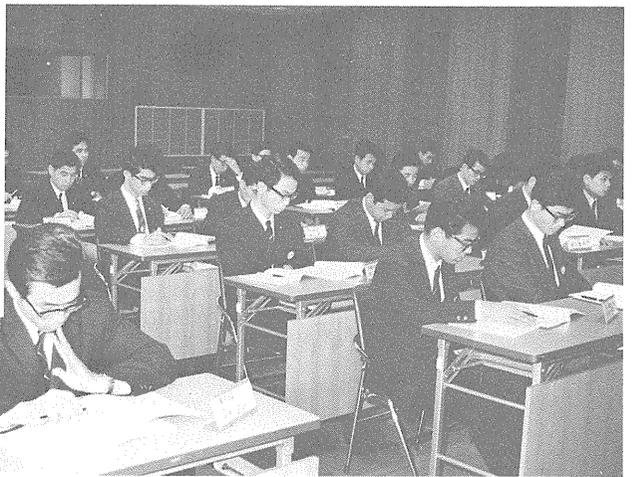
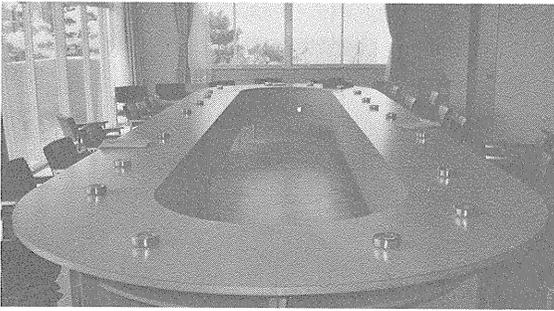
情報革命の花形、データ通信は昭和43年に発足 ついで為替史上画期的といわれた地銀データ通信も同年開通した



横浜市のマルク債発行に際して、当行は欧米主要銀行とともにその起債引受銀行となった



昭和43年に完成した研修の殿堂葉山研修センター 視聴覚設備を備えた講堂(右下)のほか研修室(左下)4室、80名収容の宿泊設備を備えていた



福利厚生の一環として昭和43年から献血会(上)や女性教室(下)が発足した 女性教室は県下39の各種学校と契約し約700名の女子行員が参加

